

ただ、こんな時があります。それは、

「先生、これ食べるのはいやです」というので教師が

「どれどれ、こんなおいしいそうなおかず、なぜいやなの、先生少しもらおうかな」

と言って、いやだと言うものを食べてみて、これでは子どもは、よろこんで食べられないかと思うほどのものがあります。つまり、みずくさいのです。そこで教師は、味塩をふりかけたり、しょうゆをかけたりしてやると、ペロリと食べてしまうことがあります。

そうです、おべんとうのつくり方に問題があるのです。この点について、お母さん大変と思いますが工夫して下さいませ。

## 伝言について

「あしたは、かんしゃさいです。みんなで、くだものをいただきますから、くだものをたべるときにつかうフォークを、おうちからもってきてください」

当日、年少組、年中組、年長組の子どものほとんどが、フォークをもって来ましたが、もって来ない子どもが年少組で $\frac{1}{3}$ 、年中組で $\frac{1}{4}$ 、年長組で $\frac{1}{10}$ でした。

しかし、もって来なかった子どものうちで、「お母さんに言ったんだけど、お母さん忘れはった」というものもいました。

もちろん、もって来なかった子どもには、園で用意してあるものを教師が与えたり、教師が、それを予想して個人で準備をしておきました。

ときどき、各クラスで、どこまで子どもたちが教師の言ったことを聞いて、それを覚えて、その意味を自分なりにつかんで（理解して）、お母さん（相手）に伝えることができるか、ということをしらべたり、たしかめることがあります。

伝言とは、ただ聞いてそれを復唱することではなく、聞いたことを、まちがえずに内容を伝えるということです。

正しく伝言が出来るためには、話しの意味が正しくとらえられている、という理解する能力が必要です。そしてさらに伝言には、正しく内容を、自分の言葉で語るという創造的な言語化という能力も必要になります。

これを整理しますと次のようになります。

伝言には①に正しく聞くという態度が必要です。

伝言には②に聞いたことを覚えるということが必要です。

伝言には③に覚えるという機械的なことだけではなく、聞いた伝言の内容を正しく理解するという能力が必要です。

伝言には④に理解した内容を相手に自分の言葉で表現するという能力が必要です。

以上の通り、一見なんでもない伝言ということでも、大変な能力や集中した態度や努力が必要なのであります。

ですから、伝言が出来ない子どもは、先生の言うことを集中してよく聞かず、ボーとしていたか。聞いていても、それを覚えることが出来なかったか。また覚えなかったか。さらに、教師のいう伝言を理解できなかったか。したがって、自分の言葉で表現出来ないのかのいずれかです。勿論、伝言しても、お母さんが、いいかげんにしか聞かなかったというお母さんの責任で忘れて来たという場合もあります。

いずれにしても、ご家庭でも伝言の練習をさせて下さい。

右にかかげた①②③④の能力を育てることになります。そして、これらは、今後の子どもの学習生活、社会生活に大きなえいきょう力を残します。

○お使いに行かせること。

○人を呼びにやらすこと。

○となりの人につたえる仕事など練習の場はいくらでもあります。

## 六才 は 更 年 期

普通一般には、更年期といいますが、女性が成熟期から老年期に移行する時期をさし、その時期に肉体的にも精神的にも変化が出て来ることを更年期症状と言っています。

ところで、幼児の六才程度において新たに精神発達が始まりますので、情緒の表現と感受性の面で変化があらわれて来ます。つまり、一つの変化がおこるという意味で、表題のごとく「六才は更年期」と言ったのです。

それでは六才ごろにどのような変化がおこるのか、以下に於て少し記してみたいと思います。ですので、このことをよく知って、正しくお子さんに対処していただきたいと思います。

五才児のころには、情緒の面で一応基礎的発達が完成し、落ち着きのなかにいたわけですが、六才になると、先にも記した如く、また新たに精神発達が展開し始まりますので、情緒面での安定がくずれて来ます。そこで、興奮したり、落ちつきを失ったり、甘えたり、ちよっとしたことでも泣いたりすることが起り、お母さんたちは、一体どうなったのかと心配

します。しかしこれらは、発達成長して行くために通る出来ごとなので、あまり心配する必要はありません。

● 泣くこと。五才のころはあまり泣かなくなっていたのに、六才頃になると、ちょっとしたでも泣く傾向がみられます。六才児は泣き虫といわれるぐらいめめそめそします。

しかし、七才になると泣くことも少なくなつて来ます。

● 恐れ。六才児は、想像的なものに対する恐れが出来るようになり、眼の前に見えないくても、それを想像したり、抽象したりして恐れることが出来るようになります。

お化け、ゆうれい、火事、けがで血が出ること……などです。

● 怒り。六才ごろになると、おこりっぽくなり、周囲の人やものに対して攻撃的で、かんしゃくを起こしたりします。

しかし、七才をすぎると、この傾向はおさまつて来ます。

● 愛情。六才ごろになると男の子は母親に、女の児は父親に、それぞれ強い愛情を示すようになります。

ですから、六才ごろになると急に甘えんぼうになって、お母さんをびっくりさせます。

以上の通り、六才児は一種の更年期であって、その症状がいろいろと生活の中で出て来ます。お母さんは、そんな時、理解してやり、黙認したり、受けいれてやったりした後で、必ず上げましてやって下さい。

決して、頭から怒ったり、笑ったりして拒否しないでいただきたいと思えます。

六才児のお子さんをもっていられるお母さん、がんばって下さい。七才ごろになると落ちついて来ます。

## — 自 立 —

幼児の自立について考えるとき、最も大切なことは、「生活習慣の自立」ということで

す。

生活習慣とは、食事にかかわることがら、排便について、また衣類の着脱、さらに手洗い、うがいなどの衛生についての習慣等々です。これらの生活習慣が自立しているかどうか。五才ぐらいになれば、特別な場合をのぞいてほとんどの子どもは自立しているはず

です。  
自立とは、自分でひとり出来る、ということ。お母さんが、「手を洗いなさい」、  
「靴をはきなさい」「帽子をかぶりなさい」……などと、いちいち指示をしなくても、ひとりですることが自立です。たとえ、それらの能力があったとしても、その子どもが、自分ひとりでしなければ、その子どもは自立しているとは言えません。

いっぺん試みに、お母さんが一切の指示を子どもに出さずに見て下さい。そのとき、子どもがぐずぐずしていたり、うまく出来ないとすれば、その子どもは、お母さんの指示に従って、他動的に動いていたということになります。こんな子どもは、いつも誰れかに指示されなければ何も出来ない子であり、ぐずぐずして生活のけじめがつかない子どもに



なるかもしれません。

子どもが大きくなるにしたがって必要なことは、自分のことに責任をもって、自分で人生を切り開いていく自立性、自主性との気力があるという人間になる、ということなのです。

そのために親に必要なことは、子ども自身に工夫させ、子ども自身にやらせ、しんぼうさせて、口や手を出さない、ということなのです。

子どもが失敗しないうちに口や手を親が出してしまうということは、子どもを助けているのではなく、子どもから自立性、自主性をうばいとつていることになるのです。

親は口出しをするな!! ということは、決して親は子どもを放任しておけ!! というのではありません。

子どもに自立性、自主性を養うために、子どもを見守つてやれということが口出しをするな!! ということです。

つい口や手を出してしまう、子どもにやらせない、この場合親が忍耐することです。じつと子どもがひとりであることを見守つていてやる、これがかしい母親、やさしい母親

であります。

五、六才児をおもちのお母さん、とくにがんばって下さい。

やってみよう、と思うだけでなく、決断して実行してみてください。

## カルタとり大会

先日、白百合ホームでは、去年のクリスマスに、全園児にプレゼントしたカルタを用いて、カルタとり大会をおこないました。

このカルタとり大会の目的は、みんなで仲よく楽しむ、ということだったので、みんなが積極的にかつ、意欲的にカルタとりにかかわってくれるようにと願い、そのために、「だれが一番多くさんとしてチャンピオンになれるかなあ」と言って、それとなく期待を

もたせ、意欲をかきたたせておきました。

さて、当日の朝、ある園児は、「先生、ぼくチャンピオンになるのや」と、登園早々に意気込んで話してくれました。おそらく「しつかり、やってくるのよ」と言って、家の人に送り出されて来たのでしょう。これと同じような園児が他に二、三人いました。

そして、結果は、意欲的にかかわった園児たちが、多くカルタをとって上位をしめました。当然と言えば当然と申せます。

それにしても、カルタとりという動作のうちには、将来子どもたちがかわる課題に正しく、早く対応出来るための知覚の基礎的な訓練となる重要なものが含まれていると思われます。即ち、正しく早くカルタをとるためには、

- ① よく読み手の言葉をきくことが必要です。
- ② 絵の方のカルタをよく見ること、また、よく見ておくこと（記憶しておくこと）
- ③ 読み手の言葉と見ている絵のカルタと結び合せること（抽象能力、弁別する能力）
- ④ ①②③知覚の働きをす早く行い、それを手の動作に於て行動する、しかも早く動作

すること。(びんしょう性)

⑤ その他語集・用語の能力が多くなる(ボキャブラリー能力がつく)

右の五つは、カルタとりをすることによって身につく効用と言ったことになってしまいました。カルタとりをしても、カルタとりは、ただカルタとりだけで終るのではなく、カルタとりという遊びは、幼児にとって非常に大切な知覚・運動の訓練になっているのであります。

文字を書いたり、本を読んだり、けい算問題をするこのみが学びではありません。

よく這う子どもは、しっかり立って歩ける子どもになります。おはしをしっかりと使える練習をした子どもは、えんぴつをしっかりと持って文字を正しく力強く書ける子どもになります。また、親にすぐ手伝って助けてもらうことなく、自分で努力して、考えて、しんばうして自分のことは自分でして来た子どもは、努力して何事にもかかわり、よく考え工夫し、忍耐力のある子どもになります。

大切なことは、幼児期の遊びに於ける体験の一つ一つは将来のための準備的な学習行為

である、ということですよ。

「こんなこと、どうでもよい」などと決して親は思ってはなりません。一つ一つ真げんに一生懸命にかかわらせて下さい。そのためにはげましてやって下さい。

## 幼児の着衣行動について

着物を着たり脱いだりすることを、着衣行動といいます。

新学年度が始まり、三才児、四才児の新入園児が登園しはじめて四日程になります。今までお母さんの側にいて、何をするにも手伝ってもらっていました。園では出来得るかきり自分ひとりで自分のことはしなくてはなりません。

着物についても同じことです。通園衣を脱いで、園内着を着なくてはなりません。ひと

りで出来る子ども、少し出来る子ども、全く出来ない子ども等いろいろです。

そこで、着衣行動の発達の序列について三才、四才の場合を記してみましよう。

### 三十六ヶ月（三才）

① 着物を脱ぐことをおもしろがり、また出来るようになる。しかし、シャツやセーターを脱ぐときには少し手伝いがある。

② ボタン穴をとおしてボタンを押して、前と脇のボタンは、みなはずすことができる。

③ 着物を着るときに、前と後の区別がつかない。パンツは前後にはいたりしがちである。ソックスのかかとのほうを上にしてはくと、正しい位置にまわすことが出来ない。靴をはくが、左右を反対にはくことが多い。

### 四十八ヶ月（四才）

① ほとんど手伝ってもらわなくても、脱いだり着たりする。

② 着物の前後を区別して、まちがえずに着る。

（以上は、アーノルド ゲゼルによる）

いかがでしょうか、ゲゼル氏によると三才児になると、だいたいは出来るようになる、というのです。そして四才児になると自由に出来るというのです。

しかし、四才児でも出来ない子どもがいます。なぜでしょうか。自分ひとりでやるという練習が出来ていないからです。否、させてもらっていないからです。出来る能力が身についているのに、その能力を引き出し育ててもらっていないからです。いわば子どもは被害者なのです。出来る能力とは自立する能力でもあります。その能力を引き出し育ててやることは、その子どもに自立心を養い育ててやることになるのです。

着物の脱着をひとりですせることは、自立心を育てることになるのです。

教育とは、「引き出す」という行為です。三才頃から幼児は特に自分でやるうという心と、行為が強くなって来ます。親は、このことをよく知って三才をすぎれば、ことさらに則して、自立させるように手をかき手をひくべきです。着衣行動に於てもはじめして下さい。ただ、着衣行動に於て、男子より女子の方が、一般に早く自立することが報告されています。

あきっぱい子にしないために

ものごとに、ねばり強くとりくみ、やりぬく人に育てることは白百合ホームが願う教育の目標の一つです。

そこで、今回は、わが子をあきっぱい子にしないために親が気をつけねばならないことについて考えてみることにしました。

一、子どもがあまりにもよく動き回り、いたずらも激しいので、つい親がいつも注意し、ときに、その子が一つのこと熱中して遊んでいたりすると、何か悪いいたずらでも、しているのではないかと親が口を入れて中断させてしまうといったような場合。

一、親自身が、あれこれと大変気が多い場合、つまり親が一つのこと集中しないという行動のモデルを提供している場合。

一、子どもが熱中して遊んでいる時に、必要もないのに声をかけたり、子どもが、より一層興味を持ちそうなオモチャを見せたり、オヤツを与えたりすること、これらは、子ど



もの注意をそらし、一つの遊びへの熱中に水をさし、熱をさませることにあります。つまり、子どもが集中して遊んだ後の達成感（ヤッターという気持）や満足感（アア、オモシロカッタという感じ）を味わうことを親がさまたげていることになる。

一、子どもが「お母さんやって」と助けを求めて来たとき、かたんに助けてしまい、あげくのはては、親が代って全部してしまうという場合。けっきょく子どもは達成感・満足感を味わうことが出来ず、その遊びなり課題を途中ですててしまうことになる。

一、すぐ逃げごしになる子どもがいるが、その子どもは、自信をつける機会を与えられなかった子どもで、決して、出来ない子どもではありません。このような子どもの親は、その子どもをほめてやり満足感・達成感を体験させないで、常に、より高い水準、つまり「もっと、もっと」と要求し、それ故に、子どもはいつも親の要求を満せない不安と恐れ故に、つい逃げごしになってしまうのです。

一、自分の気に入った役割をやらせてもらえない間だけ遊びに集中するわがままな子どもがいます。

このような子どもは、いつも自分中心、自分の願いが思い通りになったような中で育った子どもに多い、そこで、自分の思い通りにならない遊び仕事に対しては、ねばり強くかわろうとせず、すぐ別なことがらに移ってしまう、あきっぱい子どもになってしまうです。

以上のことを要約的に述べますと、常に親は「良く出来たね」とか、「よく出来たね、もっとやってみよう」と言っただけで、その努力を認め、そして、ものごとの達成感（ヤッターぞ!! という感じ）、満足感（アア、オモシロカッターという感じ）を味わってやることであると申せます。

## よく考える子ども

吾が子が「創造性」のある子どもに育ててほしいと親は思う。この創造性とは「よく考える」ことであるといえます。

では、どうしたら、よく考える子どもに育てられるのか、これは仲々大変むつかしい問題です。

「子どもたちに、考える力を与えることは出来ない」と、ハッチンスという学者は言いきりました。たしかに「素質」の遺伝的な面について全く見のがして「考える力」を考ええることは出来ません。

しかし、「考える能力」は、どの人・どの子どもにも秘められているのですから、それを伸ばすためにふさわしい条件と刺激とを、ととのえてやるということは必要です。そのととのえる役割をになっているのが、家庭や園（学校）にあるのです。

では、その条件と刺激とは何かについて以下学んでゆきましょう。

「考える」ということは疑問をもつところからはじまると言えます。

「これなに？」「どうして？」などと子どもが、ひつこく尋ねるということは、すでに「考える」ことの始まりであります。

この疑問の形は大きく分けると四つになる。①「何であるか」②「なぜか」③「いずれであるか」④「いかにするか」

「お母さん、あれなに？」と子どもはたずねる。また「それなんや!!」と友だち同志で会話している。

「お母さん、電気はどうしてつくの」「どうして雨がふるの」「どうして……」、母親は時々「うるさいわね!!」と半ば叱るように言ったり、しらん顔をしたりすると「なんでやろ」と友達同志で一生涯命考えあっていたりする。

「どっちにしようかな」と遊びや仕事に於て選択に迷っている子どもを見うけることがある。「そら、大きなスコップの方がいい」と言って、砂場でトンネル作りに走ってもって行く者を見うけます。

「どうしたら、ええやる!!」と子どもたちが、キングブロックで店屋を共同作りして遊んでいる。

「どうしたら そんな飛行機作れたんや」とブロックで友だちが作った立派な飛行機を見てたずねて、自分も作ろうとしている子どもたち。

右のように「考える」ということの条件と刺激とは、親とのかかわり、先生とのかかわり、友だちとの遊びなどに於て日々刻々あるのです。また考える力は育つてゆくのです。

したがって、よく考える力は、子どもがもつ「疑問」「といかけ」に親が、それを伸ばすように応対をしてやる必要があります。

「考える」ということは、その疑問に対する答えをいかに出すかという過程の問題なのだ。ということをお忘れてはなりません。それに対する刺激を与え条件を与えることが親や教師の責任なのです。

「うるさいわね」「自分で考えてみなさい」と言って、つきはなしては「考える子」には育つてはゆきません。

## 数詞の指導について

今回は「数詞」の指導について、親としてよくわきまえておくべきことなど、記してみます。

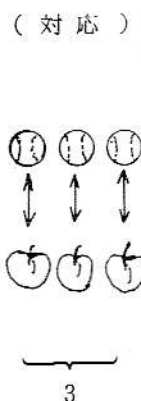
まず、数は個物の集まりの大きさをあらわすものです。ですから、個物をはなれて数えことば（数詞）を唱えさせても、本当に数を理解させたことにはなりません。例えば、数が百まで唱えられる子どもが、百という数を理解したとは言えません。ただ数が唱えられるというだけのことです。にもかかわらず、親は、百の数が唱えられれば、百の数を理解したと思いがいをしてしまうものです。

大切なことは、1という数、2という数、3という数……それらの数を、それぞれ数だけの個物の集りとして、しっかりとつかむことです。即ち、はし3本、ちゃん3個、あめだま3つ、りんご3個……というふうに「3」という数を個物の集りを通して理解させることです。

数をしつかり理解させる方法として「対応」という方法があります。

例えば、3の数なら、少し先にも申しましたが、3の個物の集りを示します。ボール

(●●●)、リンゴ(🍏🍏🍏)そして、ボールとりんごを対応させて見せるのです。



ボールの3も、リンゴの3も3なのだ、ということを通して、3とは何かということを理解させるわけです。これは、5の場合でも、6の場合でも同じです。

このような、数の学習については別に机を出して、ノートを出して、親が子どもの前に、こわい顔をして指導しなくても、毎日の生活の中で「ちょっと、おちゃん3人分並べてちょうだい……」と言ったように、お手伝いに於て、遊びに於て、おやつを渡すときに於て、いくらでも学習できるわけです。

にもかかわらず、黙って親がちゃんを並べ、おやつのアメ玉を与えたりしているとす

れば、折角の学習のチャンスを、失って無駄にすごしてしまったことになると申せます。このようにして、子どもに10の数を、し・っ・か・り・と理解させることが出来たならば、最も好ましいのです。そのために、はじめは1より2へ、3より4へと少しづつ大きくして行くことです。

このようにしながら、数の大小について又、数の分解について理解させてゆきたいと思えますが、これについては次号で記してみたいと思っています。

ひとつ、今日から、生活の中でゆっくりと楽しく、数について指導して下さい。

## 数の分解について

先号は「数詞の指導について」記しましたので、つづいて「数の分解について」記してみ



まず数を理解しているということは、数の内容を理解しているということです。では、数の内容ということは、どういうことかと申しますと、例えば、2という数は、1と1からできています。ということ、それが2の内容なのです。また3という数は、1と1と1、または2と1とからできています。ということが3の内容なのです。このようにして10までの数の内容を、しっかりと理解したとき、10の数を理解したということです。そして、数の内容を知ること。それを数が分解できた。ということなのであります。

それでは、なぜ10までの数の分解が必要で、大切なことなのかということを以下記してみましよう。

例えば

$$\begin{array}{r} 9 + 3 \\ \hline \end{array}$$

という計算を考えて下さい。

- ①……被加数(9)のところに、数10を仮定します。
- ②すると9の10に対する補数は1であることがわかります。
- ③そこで、加数(この場合3)3のなかから、1だけ9の方に移します。

④ そして、残りの2を知って答えを12とだすことになります。

計算するということは、以上のような考えを連続的に働かせることをいうのです。ところが、子どもたちにとって、むずかしいのは、①にある被加数のところに、数10を仮定する必要があることを理解させることです。

そこで、数の分解との関係を考えてみますと、

①の作業をするためには、10の数が被加数9に対して1を補うことによりできるのだ。という10の分解が理解されていることが必要です。そこではじめて②の作業ができることになります。

次に③の作業のためには加数3は1と2とからできているという、3の内容、つまり3の数の分解が必要になります。

以上のことを数字で示しますと次のようになります。

$$\begin{array}{l} \textcircled{1} \quad \textcircled{2} \\ \left( \begin{array}{ccc} 10 & \rightarrow & \\ & 9 & + \quad 1 \end{array} \right) \\ \textcircled{3} \\ \left( \begin{array}{ccc} 3 & \rightarrow & \\ & 1 & + \quad 2 \end{array} \right) \\ \text{となります。} \end{array}$$

最後に残り2を知って10と2とで答は「12」とだすこと

ことになります。

これらは、小学校での算数の仕事ですが、それらをよりよく理解し、作業を、確実にすすめて行くための基礎になるのが「数の分解」ということであります。

## 食 事 の し つ け

この号では、食事の生活習慣形成について参考となる事項のいくつかを記してみます。

● 三才頃になると、だいたいはしが使えて、こぼさないようになります。

● もし、はしが使えないなら、その原因を探し求め、ご飯を食べるのに、周囲の大人が、かまひすぎ、依頼心など強くしてしまっていないかなど。

● 食事に要する時間は、三才で三〇分ぐらいです。

● もし、食事の時間が長い場合は、その原因を考えてみましょう。まわりのことで気がとられ食事に集中していないためではないか。又、食欲がないなら、その原因について考えてみましょう。

● 三才半をすぎると、多くの子どもは、一人で食事ができるようになります。

● 四才半ごろに、一時的に、食べものについて好ききらいをいうことがあるが、必ずしも、わがままではなく、食事に対して選択できるようになったからで、一つのしるしです。

● 食事のしついで気をつけるべきことは、① おやつや、食事の時刻をハッキリさせておくこと。② はしを正しくもつように。③ こぼさないように、もし、こぼしたら自分であとしまつをすること。④ すききらいを絶対ゆるさないこと。⑤ 立ち食いはせぬこと。⑥ 食いちらすことがないように。⑦ 残さないこと。⑧ 感謝して「いただきます」「ごちそうさま」が言えること。

● 三才児の食卓について

① 食事の前に手を洗う。② みんなと一緒に食事をとる。③ 一度に口の中に多くさん入れず、少しづつよくかんで食べる。④ 食事のあとは少し休息すること。

● 四才児の食事について

① 食事の用意を手伝う。又、あとしまつができるようにする（男女をとわず）。② なくても食べる。③ 食事がすめば口のまわりをよくふく。

● 五才児の食事について

① 正しい食事のし方を、しっかりと身につけてしまう。② すすんで食事の用意を手伝う。又、あとしまつをするようにする。③ 食前には言われなくても、手を洗う。

以上、基本的な生活習慣の一つ「食事」についての習慣形成について記しましたが、習慣の形成には、はじめは上手に出来ません。幾度か失敗してはじめて上手になり、しかも習慣づけられるのですから、根気よく親は指導することが大切です。

何ごとでも練習をしないで成功することはありません。

指導に当っては、やさしく、しかも親としての威げんをもってやるべきで、決して親が

子どもの要求に負けたり、むらがあってはなりません。特に食事のすききらいは、全く親の責任であります。

## 幼児としてのぞましい絵 その1

わたくしたちが幼児の絵を見る場合、謂所「じょうず上手」「へた下手」という見方で評価をしてはなりません。

では、どういう見方、評価のしかたをすればよいのかと申しますと、「のぞましい絵か」、「のぞましくない絵か」ということで評価し、見るべきであります。

「のぞましい絵」とは一体どのような絵のことを言うのでしょうか、以下に於て考えて

みたいと思います。

① あかるい絵であるということです。

幼児にとって絵を描くということは、自分の喜びとか恐れとか、悲しみとかいった感情や情緒を表現する手段なのであります。これを少し固い言い方をすれば、幼児が絵を描くことは「自己表現」の手段なのであります。したがって、ある幼児が「あかるい絵」を描いたということは、その幼児の心があかるいということをも、ものがたっていることになります。つまり、あかるい絵を描く幼児の心は、きわめて健康的だということ、その絵は「のぞましい絵」だということになるのであります。

② のびのびと描かれているということです。

幼児にとって絵を描くことは「自己表現」の手段だ、と先に申しましたが、のびのびと絵が描かれている、ということは、その幼児が、自分というものを、思いきり出しているということです。

心のうちに不安をもっていたり、恐れをもっていたりする幼児の絵は、描く線も弱く、

小さく、型にはまっていて、どことなく畏縮しています。

③ 個性的な絵であるということ。

知的教育の分野では、常に問題に対する答は一つです。例えば一たす一は二であって、絶対に三であったり四であっては間違いです。

しかし、幼児の絵の場合、それぞれが自分の感じたことを描きます。自分の興味深い点を強調しようとしています。それは、その幼児の個性の現れであり、個性をはぐくむことなのです。にもかかからず、周囲の大人が、家はこの通り、花はこの通り、自動車はこの通り、人間はこの通りというふうに画一的な答えを指示し、要求するならば、幼児にとって絵画は苦しみであり、マイナスの作用をして、その子の成長に百害あって一利なしということになります。

時々、親が、幼児の絵を描くことに「これはこの通りでしょう」と答えを出し、それに従わせようとしても、それは大きな誤りであります。

「まあ、じょうずに描けたわねえ」



と驚ろきをもって ほめ、はげまし、何か言いたいことがあれば、そのつぎに、例えば、「もう一人お友だちがいれば楽しいでしょうねえ」といったぐあいに、サゼスチョンを与え、子どもと共に考えてみる方法はよいことです。

## 幼児としてのぞましい絵 その2

幼児として、のぞましい絵の④にあげられるべきことは内容が豊かにある絵であるということです。

では、幼児の絵に内容があるとは、どういうことを言うのでしょうか。そのことを一言でいうならば、物語りがあるということです。

例えば、ある幼児が一台の自動車を描いたとします。その場合、誰の自動車でもない自

動車を、ただポツンと描いただけでは、その絵には物語りがありません。その絵が物語りのある絵、つまり内容のある絵になるためには、幼児が、「この自動車はね、ぼくの家の自動車なんだ。お父さんが運転してね、お母さんやお兄ちゃんらと一緒に名神高速道路を、ものすごいスピードで走っているの。とてもおもしろかった」と語り、又語りながら、運転しているお父さん、窓から顔を出している自分やお母さん、お兄ちゃんを描いている、ということが必要なのです。

内容のある絵は、それを見ている者に語りかけて来る絵だと申せます。見ていて楽しさを覚えさす絵であります。

⑤ おどろきのある絵であるということです。

おどろきのある絵とは感動のこもった絵であるということが出来ます。よろこんで、楽しんで積極的に描いている絵。それは、何かを見たり、聞いたりした幼児自身の体験、その自分の体験を語りたい、伝えたい、表現したいといった思い、心の動きが出ている絵、それがおどろきのある絵であります。やくどうし、動いている絵だとも言えます。

⑥ 誠実感のある絵であるということです。

一生懸命に描いている絵、それが誠実感のある絵ということ。一枚の画紙に一生懸命描く、集中して、工夫して描く。

ときどき画帳など見ていると、少し描いては次のページへ、又少し描いては次のページというふうには、乱雑に、チャランポランに、いやいやな気持、移り気の多い気持などで描いてあるのに出あいます。それは、誠実感のない絵であります。その子どもの心がよくあらわれています。

⑦ たくましい感じの絵であるということです。

たくましい絵とは、線がしっかり描かれ、色も力強くぬられて、生き生きしている絵のことです。身体の調子が悪かったり、心の中に弱々しさ、不安などがあると、色もうすく、線も弱々しくなってしまう。

以上 幼児ののぞましい絵として七項目をあげましたが、次回には、どうすれば のぞましい絵が描けるようになるか、その指導について考えてみたいと思います。

## のぞましい絵を描くために

3才頃の子どもは、なぐりがき時代といって、何をかいているのか、まったくわからないような、メチャメチャの線を引いて楽しんでいきます。

これは、絵を描くというよりも、腕を動かすこと、腕を動かした後に線が出来ることを楽しんでいいます。

しかし、それもだんだんと「ブーブー」とか、「バンバン」とか言って、描く線に物語りがあるようになり、その時々の内容によって線をあらあらしくしたり、円になったり直線になったり又色のかたまりになったりして、心や思いが反映して来ます。

このように3才頃の子どもは、動作をたのしみながら、その結果として線が出来ているので、決して心や思いが動作となり絵を意図的に描こうとしているわけではありません。ですから、「こう描くのよ」などと親が見本を示したりしてはなりません。多くのなぐりがきをさせることにより、自然とそれが次の段階へ進む準備になっているのです。この時期

に形にとらわれるように指導することは、自己表現としての幼児の絵を、はばむことになりません。いろいろな色を用いて思う存分なぐりがきをさせてやることは、精神衛生上からも極めてよいことです。このなぐりがきを充分楽しんで幼児は、必ず次の段階へ確実に進みます。

4才頃になると、ただの丸を描いてお母さんと言ったり、頭から手足が出た人間の絵をかいたりします。この頃は、それでよいので決して胴体を知らないのではなく、その必要を感じていないのです。人間らしい図柄はそれででき上っているのです。ですから、「胴体を描きなさい」などと指示をしたりせずに、「お母さんをかいてくれたの、うれしいわ、ありがとう」と言って認めてやり、「お母さん何をしているのかな」と問いかけると、いろいろ話をしてくれます。

絵を教えるとは、かき方を教えることではありません。その子どもが、その子どもなりに感じたこと、考えたことを描かせることなのです。お母さんは、それを助けてやることが大切で、その子どもの気持を不安にさせたり、中止させる言葉は絶対にしてはなりません。

ん。

5才、6才の幼児の中には、いつも同じ絵ばかりを描いている子がいます。この場合、好きな対象だからいつもそれを描く、ということとは決して不思議ではありません。

しかし中には、同じ絵を描くことで安心している者もいます。例えば女の子で「お家と花と人形のような人間。この場合、「これは誰れのお家なの」とか「この人は誰れなの」とか語りかけて行き、もう一つの家を描かせたり、友だちをもう一人加え遊んでいるところにしたりして、その絵の中に物語りを見るように導きます。そうすることにより同じ絵から発展させ、不安をとりのぞき、描く自信をつけさせ、明るくのびのびとした個性のある絵にすることができます。それは同時にその子が明るくのびのびなることです。